

# ヤスパースの青少年時代

松田幸子

## はじめに

カール・ヤスパース (Karl Jaspers, 1883~1969) はドイツの実存哲学者である。ここでは彼の幼少時代から哲学にたどりつくまでのプロセスを概観した。彼は幼いころから病弱であり、そのために医学を志したこともあったが、最終的には妻となったゲルトルートと出会い、その支えのもとで哲学へ転進した。ヤスパースによれば、彼の哲学は妻との共同作品であり、これは彼の言う「愛しながらの闘い」の実践であった。その妻がユダヤ人であったために彼はハイデルベルク大学教授の職をナチスによって追われるが、彼にとってはそれさえ研究にとってよかったと後に言ったのである。

## 第1章 父と子

「両親のことを考える場合・・・私は自分自身のことを語っているかのような最大の身近さを感じ」と語っているヤスパースは、両親の影響、とくに父親の影響を強く受けて育っているのである。それは彼の考え方のなかに多くみられるのであるが、しかしヤスパースのたどった人生は、父親とはまったく異なったものであった。

ヤスパースの父親は法律を学び法務官になり、30歳の若さでブトヤーディングンの郡長になったのである。当時、郡長といえば小さな殿様のような地位であったが、その後、貯蓄貸し付け銀行の頭取の話がくると、彼はあっさりとその話に乗ってしまった。その転職についてはヤスパースの祖父母や知人たちは、なぜ品位のある行政官の地位を捨てて品位のない銀行家になったかを理解できなかったという。しかし彼にとっては、官吏の職には上司がいて重苦しく、さらに将来家族の扶養のためには、官吏以外の仕事で多くの収入を得たいと考えたのであろうとヤスパースは述べている。それというのもヤスパースは父親から次のようなことを聞かされていたのである。

ヤスパースの祖父は先祖から豊かな財産を相続していながらすべてを失ってしまい、かなり苦しい生活を強いられていた。そこでヤスパースの父親は、自分の力で豊かな家計を築きその中で自由な生活をしたいと考えていたということである。そのよ

うな豊かで自由な生活を築いた父親は、休みの日には狩猟をしたりしてすごしていた。そのような趣味はスケールが大きく、例えば一つの島を長年にわたって借りきり友人、知人とともに狩猟を行っていたという。

16歳になったヤスパースが学校で友達にいじめられた時、父親は広い狩猟場を息子のために借りきって自然の中で生活できるようにはからってくれた。ヤスパースは自然の中での生活には満足したが、狩猟のほうの腕前は少しも上達しなかったし、興味も持てなかったようである。それ以来父親は、ヤスパースを狩猟に連れ出すことはなかったが、子どもの教育には熱心であった。

父親の子どもにたいする教育方針は次のようなものであった。父親は子どもたちが赤ん坊のあいだは調教師であるが、子供の理性が目覚めたばあいには子どもたちと理性的に話しあって納得させねばならない。このように父親は子どもたちを理性の原理によって教育したのである。

その具体的な教育原理の第一は、子どもたちがよい手本を見て育つようにと両親自身も自分の行動をつつしみ、子どもの模範となるようにつとめたのである。

教育の第二の原理は、単に父親の権威でものごとを子どもに押し付けて従わせるのではなく、子どもたちに何故そのようなことをするのかということをも十分に理解させることだった。

このこととは別に、父親は短い言葉で人間として大事なことを教えることがあった。それは誠実さ、公明性、忠実さ、理性と自然、勤勉と実行というような言葉であった。これらの言葉は後にヤスパースの哲学のなかに見られる概念を含んでいる。

ヤスパースの父親の教育の方法は考えぬかれたものであったが、それを証明するような多くのエピソードがある。たとえば、ある大臣夫人が、子どもには絶対に服従することをしつけなければならないと話したことがある。それにたいしてヤスパースの父親は、子どもの服従は子ども自身が納得したものでなければならないと答えたということである。

これを実際に証明するような事柄が起こった。それはヤスパースがギムナジウムの生徒の時の出来事であった。ヤスパースは風邪を引いており、医師の注意を守って体操の時間に上着を脱がなかった。つねに軍隊的な調子で生徒を指導していた体操の教師は、自分の命令に従わないヤスパースを校長に訴えたのである。校長は、本校では命令に従わなかった前例はないと怒り、父親の勤める銀行まで行って父親に苦情を述べた。それにたいして父親は、軍隊の規則と学校の違いを述べてから、軍隊では無条件

の服従が必要であるが、学校での服従には条件があるはずだと説明した。その条件というのは、教師は生徒から人格的尊敬を受けているということである。もし生徒の尊敬に値しない教師が、生徒の行為が間違っていると判断した場合には、生徒は教師の言うことを聞かないであろう。息子のヤスパースは確信をもって行動したので、教師に謝るということは息子の正義感が許さないと考えられる。このようにヤスパースの父親は息子の側に立って弁護したという。このような校長と父親の考えの違いは、当時、多くの人々のあいだで話題になったということである。

また気の弱いヤスパースが自分の成績を気にして、落第するのではないかと心配した時に、父親は彼に次のように言った。「カール、君の義務を果たしてなお落第するのであればそれはちっとも構わないよ。己れのなしうることをなすということだけが重要なのだ。人が何に到達しうるかということは、その人自身の力のうちにあるのではないから」

さらにヤスパースの父親が如何に理性的に子どもに接していたかを伺い知る一つの挿話がある。ヤスパースが14歳のときに自転車欲しと父親にねだった。当時自転車は高価なものだったのですぐには買いあたえなかった。ヤスパースはその時はがっかりした様子を見せていたが、翌日には機嫌よく鉄の輪をころがして遊びはじめた。これを見た父親はこのあきらめの良さがさっぱりしていたので、すぐに自転車を買ってあたえたと言う。父親が彼に教えたかったことは、自分の願望がかなわなくても意気消沈せずにあきらめることも大切であるということであった。

その後ヤスパースと父親は二人で泊りがけで自転車旅行を楽しんだということである。

以上のように青年時代までのヤスパースと父親は、非常に親密な関係をもちながら生活したのであるが、二人の間には大きな性格の差が見られた。父親は具体的な問題や仕事については常に周到な配慮のもとで行ったが、それ以外では狩猟をしたり絵を描いたりして人生を楽しんだのである。父親の本性のなかには、ヤスパースとは異なり哲学的な思考はまったく見られなかった。

## 第2章 ヤスパースの病気とそれに対する態度

ヤスパースは幼い頃から体が弱かったが、父の友人でもあった家庭医は彼のことを健康であると家族に説明していた。それ故その医者は父親とヤスパースが泊りがけで自転車旅行に行くことも、狩猟に行くことも許していた。そのことがヤスパースの人

生にとってよい結果をもたらすことになったとヤスパースは回想している。もしヤスパースが病弱であると判断されたとすれば、父親と自転車旅行を楽しむことも、当時の社会的な慣習からギムナジウムの卒業も遅れたであろうとヤスパースは述べている。

ヤスパースの病気は両方の肺の収縮、気管支拡張症、気腫、蛋白尿症など深刻なものであった。このような病気をかかえていたヤスパースは、病気が自分の生活と切り離せないものであるとしたならばそれを限界状況と受けとめ、その状況の中で自分の生き方を決めれば良いと覚悟を決めたのである。そしてヤスパースは、病気であったがゆえに物事を熟考するようになったと言っている。

ヤスパースが18歳の時、彼の病気を正しく診断し、彼が死を迎えるまでヤスパースの主治医であり続けたのはフレンケル博士であった。彼は病気を支配することをヤスパースに教えた。そして次のように言った。

「病気を事実として受けとって、自分の計画のなかにそれを組み込まなければならぬし、患者は自分が病気であることを恥じてはならない。」

ヤスパースはこの言葉に忠実にしたがって生活生していたが、ローマへ行きたいとヤスパースが言ったときにフレンケル博士から受けた忠告には反発した。

「君は気候のよい療養地でまったく安静な生活をして夏学期のために身体を強くしなければならない。イタリア旅行が君にとって有害なのは確実だ。」

ヤスパースは療養地でただぶらぶらしているだけの生活はしたくないという思いがあったので、両親には次のような手紙を書いている。

「フレンケル博士の権威よりも私の主観的な力の自覚を尊重して下さるならば、私は療養地には決して行きません。」

このことがあってからヤスパースは、自分の健康のことは自分で考えて生活するようになったのである。彼は特に自分の慢性的な気管支拡張症の病気は、一つの運命と考えたが、しかし彼は社会の一員として職業にはつきたいという強い意志を持っていた。そうでなければ自分のような病弱な人間は、この世のなかで不必要な人間になってしまうと考えていたからである。職を持つためには、病気のあらゆる症状を正しく把握し、その治療法も自分で考えねばならないと思った。

そしてヤスパースの考えによれば、気管支拡張症にたいしては転地療養の必要はなく、薬もほとんど効果を示さず、ただ夜中の発作をやわらげるための薬コデインのみが必要であった。さらに旅行中には頻繁にうがいをし、寒い場所での仕事や体操など

は身体に負担がかからないように注意しなければならない。これらはすべて治療のために労力を使い、そのために読書が出来なくなるということを恐れたためであった。

このようなヤスパースの考えでは、患者のみが自分の病気の正しい観察者であり、医師は病気の当事者ではないので十分な観察者ではありえないというのである。医師は患者本人の経験を尊重することによって、患者と医学的な交わりを結び、そのことが患者にとって有益な結果をもたらすとヤスパースは考えていた。

ヤスパースは最初にハイデルベルクとミュンヘンで法学を学んだが、おそらく病気のこともあったと思われるが、ハイデルベルクで医学を学び、そこの内科教室で研究医として勤務したりしたが、その後、さまざまな経緯を経てハイデルベルク大学で哲学教授に就任したのである。

### 第3章 哲学への転進

ヤスパースが哲学者として『哲学』という著書を書くまでの経過を簡単にたどってみたい。ヤスパースは最初、ハイデルベルクとミュンヘンの大学で法律を学んでいたが、途中からハイデルベルクで医学部に転入した。その後1909年にハイデルベルク大学で医学の学位を取り、精神医学教室の助手になった。1913年にはハイデルベルク大学哲学部で心理学の教授資格を取り、翌年から私講師として心理学の講義を始めた。1912年にはハイデルベルク大学哲学部の正教授となり、1931年には『現代の精神的状況』を、またその翌年には『哲学』を出版した。この『哲学』の内容は、本来的な自己自身となるなり方を、世界および存在そのものとの関連を一般的に示したものである。いかえるとこれは実存哲学者としてのヤスパースの出発点となる著書であった。

このように法律から医学、心理学、そして最後に哲学へと転進した理由は何であったのだろうか。結論的に言えば、第2章で述べたように、ヤスパースが生涯にわたって病弱であったからだと推測される。彼の病気は一般的に、30歳ぐらいまでしか生きられないと思われていたものであった。しかし彼には、一つの職業につき社会の一員になりたいという強い意志があったのである。それ故、最初は現実的な法律家をめざし、医学を志したのは自分の病気を見つめ、人間理解に役立つと考えたからである。しかし医学部では病弱な身体では負担が大きすぎるという不安もあったし教授職にも空席がなく、やむなく哲学部に移籍したと思われる。そこで最初は心理学を講義していたが、哲学教授の席が空いたので哲学に転進することになった。

ヤスパースが哲学教授にたどりつくまでの道程には、かなり恣意的なところが伺えるようであるが、もともと彼には哲学的な思考の傾向があったようである。1904年12月31日（彼は当時ハイデルベルク大学医学部学生で20歳であった）の日記には次のような文が見られる。

「私は死んだ人間だ。多くの人にとって私は堪え難いものであろう。何らかの友との魂の一致はもはやなく、女性の愛もなく、何かを生み出す力もない私に今なお生きる目的はあるのか……。何をしたらよいか」。このように医学生という立場にありながらも、彼の心は不安定であった。しかしその後1907年にエルンスト・マイヤーとその姉ゲルトルート・マイヤーと出会ったことが、不安定な精神状態にあったヤスパースを大きく変化させたのである。同じ医学生であったエルンストとはあらゆることを語りあえる仲となり、またエルンストはヤスパースが哲学者になるための力を与えてくれた。

それ以上にヤスパースの考えに大きな影響をあたえたのはエルンストの姉ゲルトルートとの出会いであった。ヤスパースとゲルトルートは出会った最初から哲学を学ぶことの意味について意見が一致した。

ゲルトルートは大学で哲学を学ぶためにギムナジウム卒業試験の準備をしていた。ヤスパースは医学生でありながらそれに満足せず、自分の生き方のなかに真の生き方を見つけようとしていた。つまり彼は自分の行き方について哲学的な悩みを抱えていたのである。当時ゲルトルートは肉親に慢性的進行性の精神病患者を持ち、自分がユダヤ人であるということ、さらに友人が自殺したということなどで大きな精神的な悩みを持っていた。それにたいしてヤスパースは自分の病気と闘いながらも、両親の愛によって経済的にも精神的にも何不自由なく生きていた。このように二人の悩みは質的に大きく異なっていたが、二人は人間の生き方にかかわる本質を持つ哲学について話し合ったのである。ここで医学生であったヤスパースは、ゲルトルートから哲学への考え方をおおきく変化させられた。

1910年、ヤスパースは27歳でゲルトルートと結婚し、病弱な彼は彼女によって支えられるようになった。そしてつねにゲルトルートはヤスパースの作品を読み、批評し、いわば愛しながらの闘いをしながら共同で研究生活をしていたのである。この間にヤスパースは『精神病理学総論』を出版し、1921年にはハイデルベルク大学哲学部の正教授となった。そして1931年に『現代の精神的状況』を、翌年には『哲学』を出版したのである。

これがヤスパースの哲学転進までの道程である。

1933年にドイツでヒットラーが政権をとり、ナチスの独裁体制となってユダヤ人に対する迫害が始まった。ヤスパース夫人のゲルトルートはユダヤ人であったために、ヤスパースは夫人と離婚するか、または大学教授の職を捨てるかの二者択一をナチスから迫られた。その時ヤスパースは、自分の哲学は妻との共同作品であるので妻との離婚は受け入れられないと断ったため、1937年にハイデルベルクの教授職を追われ、翌年には著書の出版も禁止されたのである。（この間の事情は上田女子短期大学紀要、31号、2007年に詳しく筆者が紹介している）。これ以後ヤスパースは出版のあてのない著書『真理について』を書き続けていた。（この本は小倉志祥東大教授と筆者との共訳で1985年に理想社から出版されている）。

ヤスパースはゲルトルートとの出会いによって自分が哲学研究に進むことを心に堅く決意したが、その具体的な哲学の内容は漠然としていた。このヤスパースに影響を与えたのはキルケゴール、ニーチェ、マックス・ウェーバーであったが、とくにウェーバーの影響は大きかったようである。

彼がウェーバーに出会ったのは1909年、26歳のときであった。ウェーバーは社会学者であり経済学者であったが、ヤスパースにとってウェーバーは、むしろ人間や人間存在について無限の関心を持つ実存哲学者のように見えた。つまりヤスパースにとってウェーバーは、自分の問題を誠実に問い、自分自身であり得ることを欲する実存哲学者であった。彼の生き方の全体から見て、当時の人々に哲学する方法を教えることができる唯一の人であるとヤスパースには思われた。

ヤスパースはウェーバーから影響をうけて「哲学とは何であるか」について若い人々がみずから考えるように訴えることが自分の使命と考えたのであった。その使命感に燃えて計画的に哲学研究に従事しようと彼は決意したのである。したがってヤスパースの哲学思想は、ウェーバーによるものが多い。

たとえば彼の哲学のなかにある「交わりの公明性の心構え」や、「みずから実存しつつ他者を本来的自己へと覚醒させるような交わりの遂行者であれ」というような言葉のうちには、ウェーバーの考えが入っている。

## おわりに

ヤスパースは生涯にわたって病弱であったにもかかわらず、幼いころは両親の愛に見守られ、結婚してからは愛する妻ゲルトルートに支えられながら多くの著作を出版

することができた。このようなヤスパーズについて述べてきた筆者は、ここで筆者個人として印象深いことがらについて触れてみたいと思う。

ヤスパーズの人生は常に何かとの闘いのうちにあったように思われる。まず彼は幼少の時から病気と戦わねばならなかった。そのためにギムナジウム時代には教師との間に軋轢を起こし、校長や父親まで巻き込むような事件もあった。質的にはまったくことなるが、結婚後は愛する妻との間で愛しながらの闘いをしながら自分の研究を進めてきた。たとえば自宅での研究に疲れ休もうとするヤスパーズにたいし、ゲルトルートはもう少し続けるようにとうながしたり、また大学では講義や会議、図書館に行くとき以外は研究室を離れてはならないと注意されていたという。だからこそ、後にナチスからユダヤ人の妻と離婚するよう迫られたとき「自分の哲学は妻との共同作品である」と言って大学教授の職を捨てたのである。このようなエピソードを知るにつけ、彼の哲学はゲルトルートとの間の愛しながらの闘いの中から生まれたものであると思われる。

またヤスパーズの教えを求めて集まってきた若い学生にたいして、哲学は人が教えたことを学ぶのではなく、私たちが哲学しながら私たち自身の生き方へと導かれるものであると言っている。そしてなお交わりの中で他者と自分の実存と出会うことであると教えたのは、ヤスパーズの深い経験からだと思われる。彼が哲学にたどりつくまでのプロセスを見ても、このことはよく理解できる。

## 参考文献

1. Karl Jaspers, Schicksal und Wille, 1967.
2. 林田新二訳 カール・ヤスパーズ著『運命と意志』 1972年 以文社
3. 林田新二著 『カール・ヤスパーズ』1967年 塙新書
4. ロベルト・シンチンゲル著『カール・ヤスパーズの思い出』寺脇不信訳 1986年 北樹出版
5. 松田幸子 「ヤスパーズとハイデガー」上田女子短期大学紀要31号 2008年